

まちづくり・潮来の自然と歴史を知る

潮来市の誇れる文化

第128回

大生古墳群

潮来市街から北方約5kmの大生に所在し、標高36m前後の平坦な丘陵地帯。昭和27年から35年にかけて調査が実施された。この調査は、郡内ではじめてで、46年に調査の報告書が刊行された。確認された古墳は、分布状況から東西に分けられ、東古墳群は、2基の前方後円墳と1基の方墳、約60基の円墳で、西古墳群は、5基の前方後円墳と32基の円墳からなり、県内でも最大の古墳群であることが分かった。古墳は、古墳時代4世紀〜5世紀のころのお墓である。

埋葬された人びとの名前を墓に残すことがない時代だったので、これらの古墳に葬られた人々を特定することは困難である。しかし、これらの古墳群は、「和名抄」に記されている行方大生郷にあたること。また、大生神社の由来や鹿島神宮との関係や「常陸風土記」の行方の条に建借間命が国造りの初祖と記されていること。さらに「古事記」に神武天皇の皇子

である神八井耳命の末裔の中に意富臣の名があり、意富は、太、大、飢富、於保などとともに多氏を示す言葉であることから、建借間命は、多氏一族であった事が推定される。多氏は鹿島神宮を奉り、その勢力を広げていった。その中で行方郡内にも多氏一族が土着し、大生神社を中心とする大生台地に集落を形成した。

潮来市文化財保護審議会委員

長谷川 彌



潮来市の誇れる自然

第36回

最新の湖沼観測から見る霞ヶ浦の水循環

読者のみなさまはもろろんご存知の通り、霞ヶ浦は水産や観光資源として大変貴重な存在です。茨城県が誇る素晴らしい水資源・環境として知られています。しかしながら、霞ヶ浦では周辺地域からの過剰な栄養供給からなる富栄養化、貧酸素水塊(著しく酸素濃度が低い水)の発生などのさまざまな環境問題が発生しており、これらの問題の解決が急務となっています。近年の研究から湖における富栄養化と貧酸素水塊の発生は密接に関係し、貧酸素水塊の発生が富栄養化をさらに促進しているのではないかと考えられています。この霞ヶ浦における富栄養化や貧酸素水塊に関する問題を解決するためには、湖水の水循環の根幹を担う流体力学的な物理環境を解明し、さらに物理環境が生態系にどのような影響するかを把握する必要があります。

霞ヶ浦の水循環及び生態系環境の研究を促進させるために、茨城大学、国土交通省、茨城県の3グループからなる共同研究プロジェクト CERK (Circulation and Ecosystem Research) を発足させ、2018年8月から本格的な調査を開始しました。調査では最新の観測装置を用い、霞ヶ浦の循環・生態系構造を解明することを目的としています。詳細な観測の結果から、霞ヶ浦では太陽光による成層化(上下層の温度差による密度差が生じること)と風による湖水の運動が非常に複雑な流れを形成し、貧酸素水塊や富栄養化の発生に密接に関わっていることがわかってきました。

茨城大学広域水圏環境
科学教育研究センター
増永 英治



観測で用いている最新鋭の観測装置YODA Profiler (水温、溶存酸素、植物プランクトン分布を高精度に計測できる観測装置)



北浦で曳航されるYODA Profiler (中央下部)と釜谷沖自動観測所 (中央)